中央アナトリア、カイセリ地域の銅石器時代―前期青銅器時代の考古学的評価

須藤 寛史*

Archaeological Reconsideration of the Chalcolithic Period — Early Bronze Age in Kayseri Province, Central Anatolia

Hiroshi SUDO

2008 年に開始されたトルコ共和国カイセリ県遺跡調査プロジェクト（KAYAP）は 2013 年まで 6 シーズンの調査を行い、124 件の考古遺跡を登録した。この調査で得られた資料の分析により、カイセリ県における銅石器時代から前期青銅器時代の考古学的な所見を得ることができた。1）遺跡分布では、キュルテペ遺跡などの交易都市が栄えたはずの中期青銅器時代に遺跡数が減る現象を観察した。2）カイセリ県内で未確認であった銅石器時代の遺跡を複数確認し、土器の型式学的な比較から南東アナトリアからカイセリ県、およびその北西地域との交流が確認された。3）キュルテペ遺跡およびカイセリ県でカナアン石刃が発見された。紀元前 3 千年紀後半、前期青銅器時代Ⅲ期にカイセリ地域と南東アナトリアで日常的な物資の流通があったことを示唆した。

キーワード：中央アナトリア、銅石器時代、前期青銅器時代、遺跡分布、地域間交流

Kayseri Arkeolojik Yüzey Araştırması Projesi (KAYAP) registered 124 archaeological sites during six campaigns from 2008 to 2013. Analysis of archaeological material and geographical information collected by KAYAP reassessed the Chalcolithic period and Early Bronze Age in Kayseri Province, Central Turkey. First, in the Middle Bronze Age, when the region flourished due to international trading activities of Assyrian merchants, the number of sites decreased. Second, investigation of the potsherds from the surface collection revealed the presence of Chalcolithic sites, in contrast to previous ambiguous evidence in Kayseri Province. The comparative examination of pottery collected by KAYAP with the pottery of surrounding region suggested a regional relationship developped, originating in Southeastern Anatolia extending to the north-western region including Kayseri. Finally, the discovery of Canaanean blades from Kültepe and KAYAP sites suggests the distribution of domestic commodities from Southeastern Anatolia to the Kayseri region.

Keywords: Central Anatolia, Chalcolithic Period, Early Bronze Age, Settlement Pattern, Inter-regional Relationship

1. はじめに

2008 年に開始されたトルコ共和国カイセリ県遺跡調査プロジェクト（Kayseri Arkeolojik Yüzey Araştırması Projesi: 以下 KAYAP）は 2013 年まで 6 シーズンの調査を行い、124 件の考古遺跡を記録した。

この調査の目的は、カイセリ県内の遺跡情報を整備することと、中央アナトリアにおける人類の居住史を地理・地形情報と併せて把握し、中期青銅器時代に交易都市として栄えたキュルテペ遺跡（Kültepe、古代名カニシュ Kanesh）の発展の背景を先史時代に遡って探ろうとすることであった。

これまでの考古学的な成果としては、1）キュルテペ遺跡などの交易都市が栄えた中期青銅器時代に遺跡数が減ること（Kontani et al. 2014）、2）カイセリ県内で未確認であった銅石器時代の遺跡を複数確認したこと（須藤 2015; Sudo et al. 2017）、3）紀元前 3 千年紀に、南東アナトリアからレヴァント地方を中心に西アジアで広く流通するカナアン石刃がキュルテペ遺跡およびカイセリ県で発見されたこと（須藤 2018; Sudo 2021）、が挙げられる。本稿では、これらの成果をもとに、カイセリ地域の銅石器時代－前期青銅器時代の考古学的位置づけを確認したい。まずは遺跡分布の動態からカイセリ地域の人類の居住史を評価する。次いで、一部の特徴的な採集資料を手がかりに、当該期のカイセリ地域と周辺地域との関係を検討する。

*岡山市立オリエント美術館
Okayama Orient Museum

西アジア考古学　第 23 号　2022 年　91–100 頁 © 日本西アジア考古学会

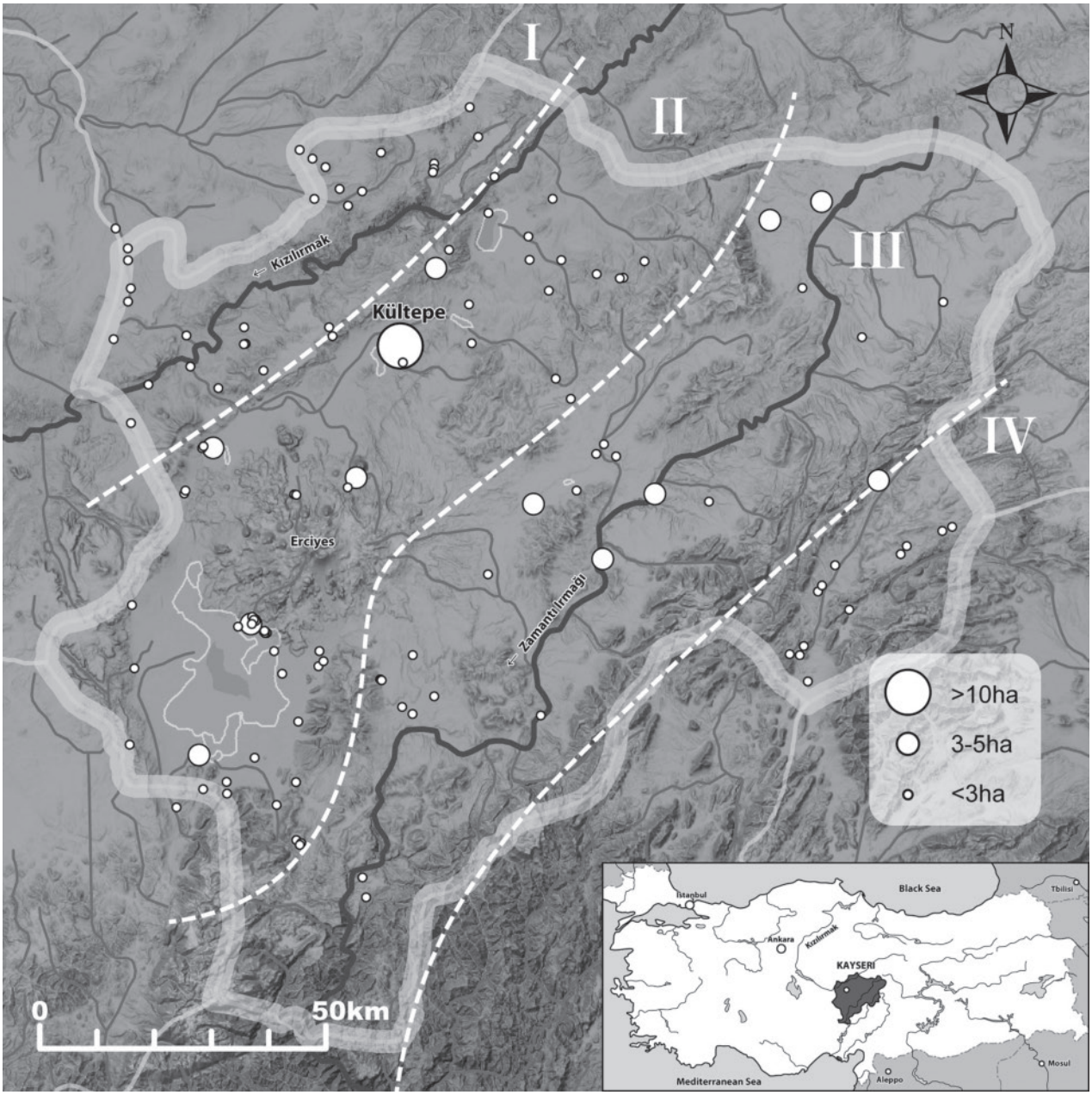


図 1　KAYAP による踏査遺跡

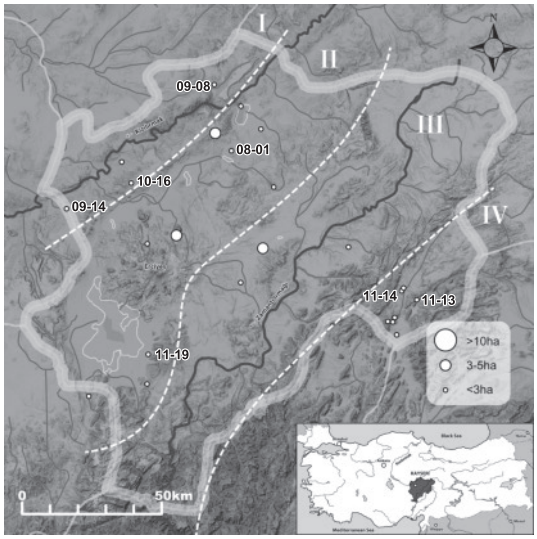
2. カイセリ県遺跡調査プロジェクト（KAYAP）

アンカラ大学 F. クラックオウル（Kulakoğlu）教授とノートルダム清心女子大学紺谷亮一教授はトルコ共和国カイセリ県遺跡調査プロジェクトを 2008 年から開始した。この調査は、カイセリ県全域の考古学的情報を整備しながら、キュルテペ遺跡（Kültepe）が中期青銅器時代の紀元前 2000 年頃に国際交易都市カニシュとして繁栄した背景を、先史時代から通時的に探ろうとするものであった。

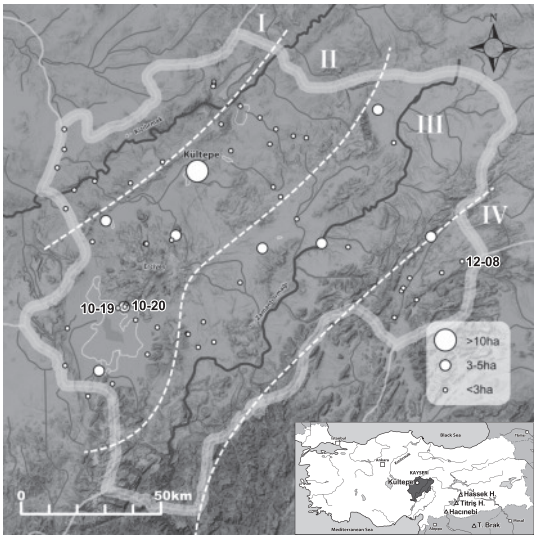
KAYAP の遺跡踏査は、重点的な地域を定めず、カイセリ県全域を網羅的に踏査する方法をとった。過去に踏査された遺跡をトレースしながら、地形図、衛星写真、聞き取り調査、車窓から見える遺丘状の地形などから、未知の遺跡を記録することもできた。2008 年から 2013 年の 6 シーズンで 124 の遺跡を記録した（図 1）。訪れた遺跡では、地表面に散布している考古遺物を採集し、GPS で位置情報を記録した。一部の遺跡では地形測量や GPR 探査も行った。

3. カイセリ県における遺跡分布

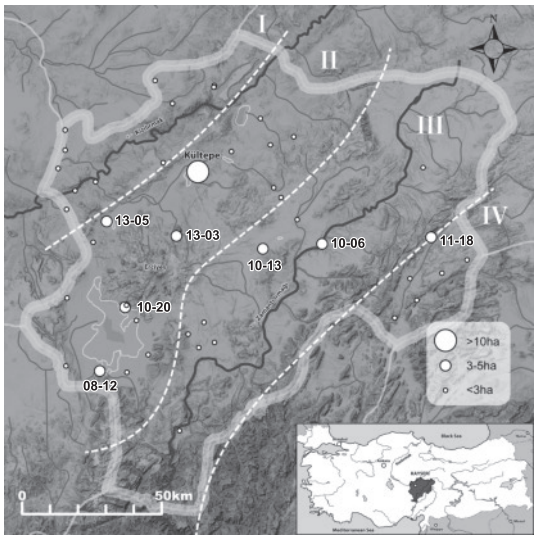
KAYAP で踏査した遺跡では、遺丘の形状をした遺跡は視認できるマウンドの範囲を記録した。その結果、キュルテペ遺跡以外全ての遺跡が 5 ha 以下の遺



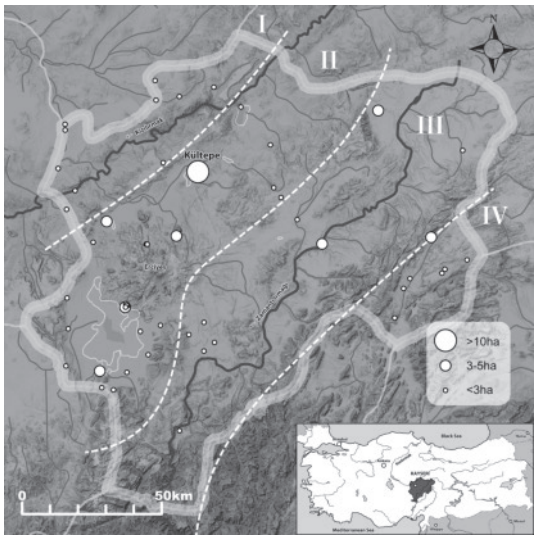
a　銅石器時代／前期青銅器時代 I/ II 期



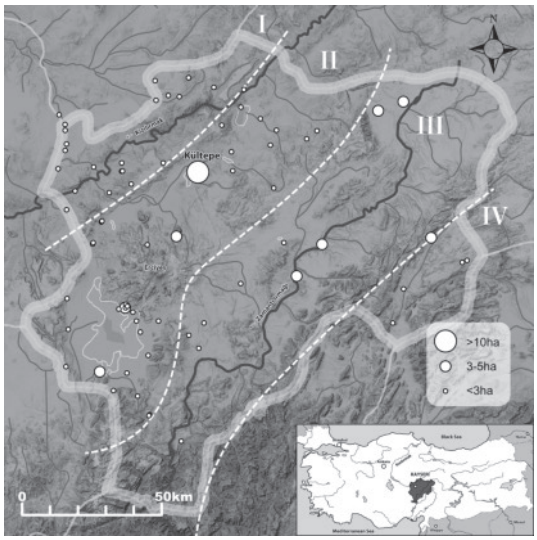
b　前期青銅器時代 III 期



c　中期青銅器時代

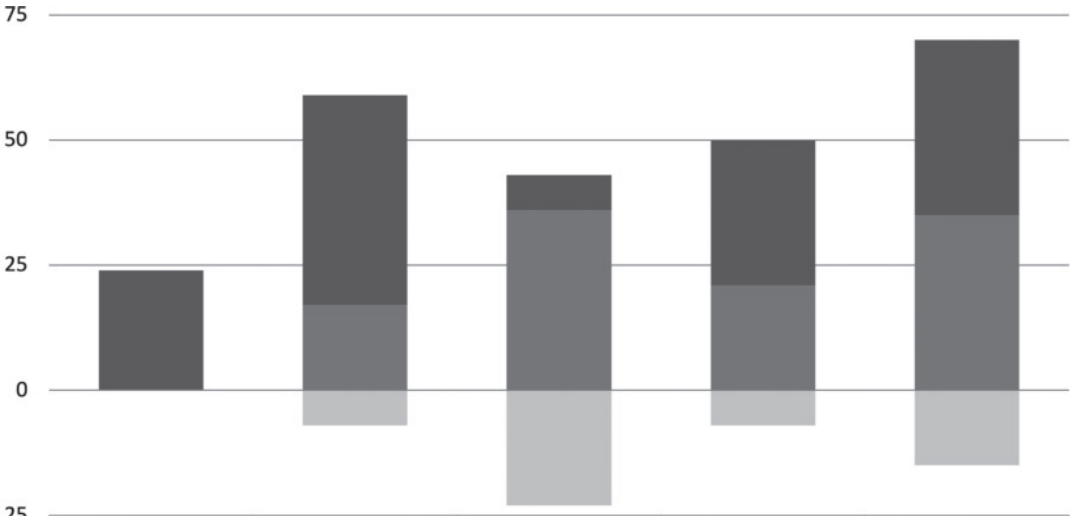


d　後期青銅器時代



e　鉄器時代以降

図 2　カイセリ県における時期別遺跡分布（KAYAP 踏査遺跡による）



	Chalcolithic/EBI,II	EBIII	MBA	LBA	IA or later period
■ new	24	42	7	29	35
■ continue		17	36	21	35
■ abandon		7	23	7	15

図 3　カイセリ県における遺跡数の変遷
KAYAP で採集した土器片の時期分類をもとに、各時期に存在した遺跡数を示した。「new」は、当該期に新たに出現した遺跡、「continue」は前時期から当該期まで居住が継続された遺跡。「abandon」は前時期には居住されていたが、当該期には居住がなかったと思われる（当該期に比定できる土器片が採集されなかった）遺跡。

跡であった。キュルテペ遺跡は、遺丘部分は約 19 ha、カールムエリアの推定範囲を含めると最大 300 ha と推定されており（本特集紺谷・クラックオウル論考参照）、カイセリ地域では極度に突出した存在であったといえる。

遺跡の分布と地形学的な観点、特に分水嶺により、カイセリ地域は 4 つのエリアに分けられた。まず I）北西部のクズルウルマック流域の渓谷、つぎにⅡ）中北部、キュルテペ遺跡が立地するプル・アパート・ベイスン（カイセリ盆地、エルジエス山［Erciyes］、スルタンサズル湖［Sultan Sazlığı］、デヴェリ盆地［Develi］が含まれる）、そしてⅢ）中南部、エルジエス山の東に広がる火山性台地、最後に IV）南東部、タウロス山脈［Taurus］の一部を構成する東部の山岳地帯である。I と IV のエリアには 3 ha 未満の遺跡しかなく、IV には遺丘を形成しない遺物散布地も多くあった。IV では踏査中に現代の遊牧民に会うことができ、聞き取りや放牧経路の記録を行った（紺谷他 2013: 20–23）。遺跡数が最も多いのはキュルテペ遺跡のあるⅡのエリアである。Ⅲのエリアは、遺跡数は多くはないが、3–5 ha の遺跡数はⅡと同等程度に存在する（表 1）。キュルテペ遺跡からの距離が離れるに従って遺跡面積が減少するようにもみえるが、現時点では、遺跡規模と分布に有意な関係は見出せていない。

表 1　エリアごとの遺跡数（キュルテペ遺跡を除く）

エリア	I	II	III	IV
3–5 ha		5	6	
3 ha 未満	29	53	19	12

KAYAP で記録した 124 の遺跡で採集した土器片のうち約 1500 点を、器形や時期を同定できるものとして、器形、製法、胎土、色調などの情報を整備した。

踏査遺跡で採集された土器片は、1）銅石器時代／前期青銅器時代 I/Ⅱ期（ca. 4000–2400/2300 BC）、2）前期青銅器時代Ⅲ期（ca. 2400/2300–2000 BC）、3）中期青銅器時代（ca. 2000–1700 BC）、5）後期青銅器時代（ca. 1700–1200 BC）、6）鉄器時代以降（ca. 1200 BC 以降）に分類された。この作業に基づき、各遺跡の帰属時期を定め、時期別の遺跡分布と遺跡数の推移を観察した（図 2、図 3）。

KAYAP の踏査では、カイセリ県において新石器時代以前の遺跡は確認できなかった。これは過去の調査においても報告がなかった。したがって現状では、カイセリ県で遺跡が形成されたのは銅石器時代以降ということになる。前期青銅器時代Ⅲ期に遺跡数が大きく増加することがわかった。しかし中期青銅器時代になると遺跡数は一旦減少し、後期青銅器時代以降は緩やかに遺跡数が増えていく（図 3）。

中央アナトリアの中期青銅器時代は、キュルテペ

（＝カニシュ）のようなアッシリア人居住区（カールム［Karum］）を持つ交易都市がいくつも建設され、メソポタミアとの広範・活発な交易活動により、中央アナトリアが活気づく時代であった。したがって、この時期の遺跡数の減少は、地域の衰退や人口の減少によるものとは考えにくい。前期青銅器時代から中期青銅器時代に廃棄された遺跡はほとんどが 3 ha 未満の小遺跡であり、3–5 ha の中規模遺跡は概ね維持されていた。遺跡サイズは、現状で視認できるマウンドの範囲に過ぎないので、当時の遺跡規模や集落としての機能をどれだけ反映しているかは不明である。しかし、のちの時期の遺跡の推移を見ても、中規模遺跡は維持される傾向が見られる。もし現状で観察される遺跡規模が当該時期における集落の性格と関係するのであれば、前期青銅器時代から中期青銅器時代の遺跡減少は、小集落を放棄して、拠点的機能を持つ中規模集落に人口が集中する、都市化の傾向を示しているのかもしれない。

カイセリ県の西方、カッパドキア地方の遺跡データによる分析でも、やはり中期青銅器時代に遺跡数が減少することが観察されている（Allcock and Roberts 2014）。中央アナトリアではアッシリア・コロニー時代に向けて、遺跡数が減少することが、一般的傾向として認められそうである。では、地域が活性化する時代における遺跡数の減少をどのように説明できるのであろうか。

中央アナトリアより早くに巨大な都市が発達した北メソポタミアでは、紀元前 4 千年紀中頃の都市化の時期に小規模村落遺跡が減少し、大規模都市遺跡が拡大することが観察されている。この現象に対する説明として、小村落の人口を都市遺跡が吸収したからだと論じられている（McMahon 2019）。中央アナトリアの遺跡数の変化を都市化現象の一つと見るのか、もしそうだとするならば、中央アナトリアの都市化は、北メソポタミアに遅れて進行するのか。現在行われているキュルテペ遺跡のディープ・サウンディングでの検証が期待される。

4. カイセリ県における銅石器時代遺跡の確認

踏査遺跡で採集した資料（土器）のうち、1）土器の内外面で赤色と黒色のコントラストを呈する磨研土器（赤黒土器）、2）黒色磨研土器、3）刻文土器、4）彩文土器、5）暗色粗製土器の 5 種を銅石器時代／前期青銅器時代 I/Ⅱ期とした（Sudo et al. 2017）。このうち本稿では赤黒土器と彩文土器を取り上げ、これらが銅石器時代から前期青銅器時代 I 期に属することと、カイセリ地域と周辺地域の交流について論じる。

4.1. 赤黒土器

銅石器時代／前期青銅器時代 I/Ⅱ期に比定した土器のうち最も特徴的で量が多いのが、土器の内外面がそれぞれ赤色と黒色の対照的な色調に焼成された磨研土器である。これを赤黒土器（Red-black ware）と呼ぶ。KAYAP の調査では 10 遺跡で採集された。同種の土器は、アリシャル・ホユック（Alişar Höyük）やいくつかの中央アナトリアの諸遺跡で、銅石器時代層から確認されている（von der Osten 1937; Gülçur 2004; Schoop 2005, 2008）。KAYAP で採集した赤黒土器の帰属時期をより確かにするため、破片資料 1 点に対して、その胎土に含まれる炭化物から年代を測定した。その結果、3700–3632 cal. BC という年代値が得られた。したがって、KAYAP の調査は、カイセリ県においてはこれまで十分に確認されていなかった銅石器時代の存在を明確にしたと言える（Sudo et al. 2017）。

KAYAP で採集した赤黒土器は、壺のような閉塞器形の場合は外面が黒色、鉢のような開放器形の場合は内面が黒色となる（図 4）。使用時に目につきやすい部分を黒色にしているということもできる。G. パルンビ（Palumbi）はこうした配色パターンを変動パターン（alternate pattern）と呼び、どんな器形でも常に外面が黒色になる資料群を固定パターン（fixed pattern）と呼んだ。そして前者、変動パターンの赤黒土器は、ユーフラテス川上流部を境に西方、南東アナトリアから中央アナトリアに、固定パターンの赤黒土器はユーフラテスの東方、アナトリア東部からトランスコーカサスに分布するという（Frangipane and Palumbi 2007: 239; Palumbi 2008a: 46, 2008b: Figure 6. 61; Sudo et al. 2017: Fig. 10）。銅石器時代のカイセリ地域、および中央アナトリアは、南東アナトリアと共通する要素、変動パターンの赤黒土器を共有していた。

4.2. 曲線彩文土器

KAYAP の採集資料で銅石器時代から前期青銅器時代前半に比定した土器の多くは無文の磨研土器であるが、同時期に属すると思われる彩文土器もあった。浅黄色から浅橙色の厚いスリップの上に、赤褐色の顔料で緩やかにカーブした複数の並行する曲線を描いたものである（図 5）。クチュク・ホユック（Küçük Höyük, KAYAP 登録遺跡番号 09–08）、ソウルジャ・ホユック（Soğulca Höyük, KAYAP 10–16）、カラ・ホユック（Kara Höyük, KAYAP 09–14）、サルジャ・デヴェ・テペシ（Sarıca Deve Tepesi, KAYAP 11–19）の 4 遺跡から、それぞれ 1～3 点ずつ確認された。先述のカイセリ県の地理区分のⅠとⅡのエリア、つまりカイセリ県の北西半にだけ見られた。当該彩文

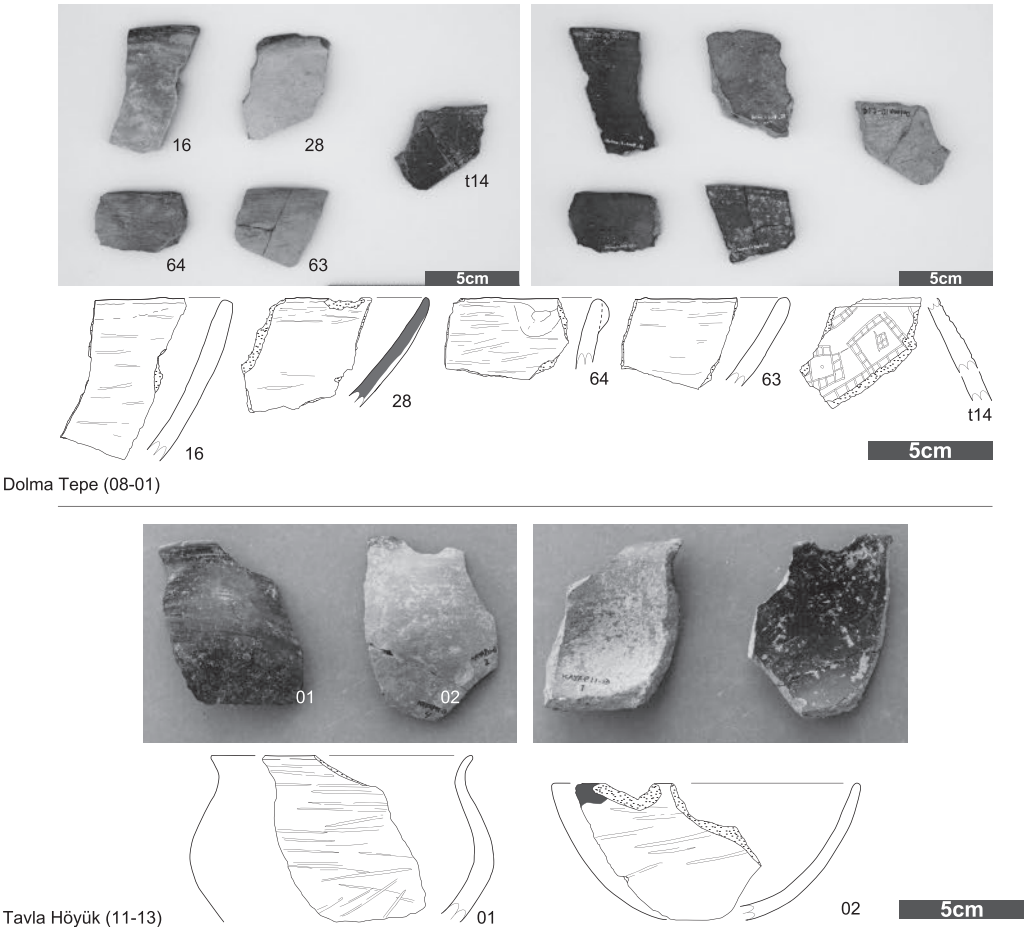


図 4　KAYAP で採集した赤黒土器

土器は小破片だけなので器形や全体のモチーフは不明であるが、KAYAP で頻繁に採集された前期青銅器時代Ⅲ期以降のインターメディエット土器やアリシャルⅢ土器の紫あるいは黒褐色で描かれる直線的な幾何学文とは明らかに違うものと判断できることから、中央アナトリアの初期の彩文土器と推定した（Sudo et al. 2017: 234; Sudo in press）。

この曲線彩文土器の帰属時期を検証するため類例を探したところ、カイセリ県より北西の地域にいくつか求めることができた。アナトリア考古学研究所の踏査で、クルッカレのイェニヤパン（Yeniyapan）（三宅 1992）とクルシェヒルのジェヴィズリバー（Cevizlibağı）（Mori and Omura 1990）から、またドイツ隊によるヨズガットの調査でソウチュク・プナル西（Söğütçük Pınarı West）（Gerber 2008）から類似する彩文土器が報告されている。そして、現在日本隊が発掘しているキュルテペ遺跡北トレンチ第 XI 層からは、同種の彩文土器が層位的事実を伴って出土した（Kulakoğlu et al. 2020: figs. 2.63.191 and 2.86.15）。これらの土器の性状の記載や図版は KAYAP の曲線彩文土器と酷似しており、筆者は同種の土器と考えている（Sudo in press）。

イェニヤパン、ジェヴィズリバー、ソウチュク・プナルの例は器形やモチーフ全体を復元できる比較的大型の破片が含まれていたことから、KAYAP の曲線彩文土器の文様は、多重渦巻文の一部であることが推察された（Sudo in press）。また、イェニヤパンとソウチュク・プナルの彩文土器については、報告者は銅石器時代に比定しているが、いずれも踏査による表面採集資料のため型式学的な推定にとどまる（三宅 1992; Gerber 2008）。キュルテペ遺跡北トレンチ第 XI 層は紀元前 3 千年紀前半の年代が測定され、前期青銅器時代 I 期に比定されている（本特集山口論文図 4）。したがって KAYAP の曲線彩文土器も前期青銅器時代 I 期に属するものと考えて良いであろう。曲線彩文土器の帰属時期を推定し、またその性格をさらに追究するにあたって、層位的事実を伴うキュルテペ遺跡北トレンチでの出土例は重要である。

4.3. KAYAP 採集土器から見る銅石器時代―前期青銅器時代初期の地域交流

KAYAP で採集した土器により、カイセリ県におけ

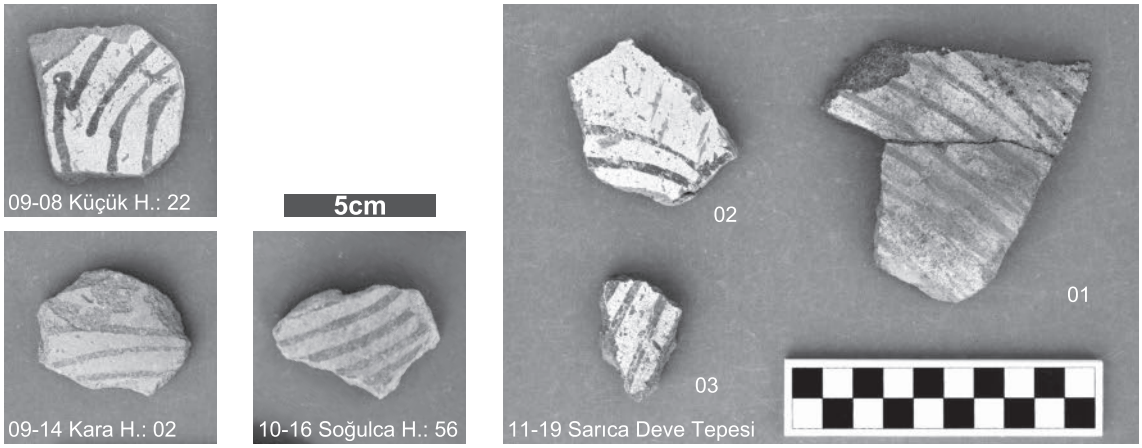


図5　KAYAP で採集した曲線彩文土器

る銅石器時代の遺跡を確認することができた。赤黒土器は南東アナトリアと、曲線彩文土器はカイセリの北西地域との類似性を示した。KAYAP で得た資料とカイセリ県の範囲に限っていえば、銅石器時代／前期青銅器時代初期のカイセリ地域は、クズルウルマックとザマントゥ・ウルマーの渓谷に直行する方向での地域交流があったと評価できる。これは、アッシリア・コロニー時代に推定されている交易ルートとも一致している（Barjamovic 2011: 巻末地図）。

5. カナアン石刃の発見

KAYAP のメンバーは調査中、キュルテペ遺跡のそばにあるアンカラ大学キュルテペ遺跡調査団の宿舎に宿泊していた。敷地のテラスに広げられていたキュルテペ遺跡から発掘された資料の中に、1 点のフリント製石刃を見つけた。幅が広く、真っ直ぐ長い形状から、「カナアン石刃（Canaanean Blade）」であると確信した。キュルテペ遺跡の過去の発掘資料にも同種の石器があることがわかり、2012 年までの発掘資料に 22 点のカナアン石刃を確認できた。また、KAYAP でも 3 遺跡（KAYAP 10-19 トパルン・プナル［Toparın Pınar］、KAYAP 10-20 イキテペ 1［İkitepe 1］、KAYAP 12-08 エルビスタン・テペシ［Elbistan Tepesi］）でカナアン石刃を採取している。

カナアン石刃は西アジアの紀元前 4-3 千年紀、銅石器時代後半から前期青銅器時代の標識的な考古遺物である。その分布範囲は広く、南東アナトリア、北メソポタミアから南レヴァントでよく知られ、イランやエジプトでも報告されている。しかし南東アナトリア以北での報告例はない。そこで筆者はキュルテペ遺跡のカナアン石刃について拙稿にて報告した（須藤 2018; Sudo 2021）。

キュルテペ遺跡のカナアン石刃は全て前期青銅器時代Ⅲ期に属するコンテクストから出土していた。石材は全てフリントで、見た目の色調により 3 種に分けられた。一つは浅黄色（Light Yellow: LY）のフリントで最も多く、12 点を分類した（図 6: 1, 2）。次はややピンクがかった灰色（Pinkish Gray: PG）のフリントが 4 点（図 6: 3, 4）、そして暗灰色（Dark Gray: DG）のフリントが 4 点（図 6: 5, 6）である。PG 色のフリントは、ユーフラテス河上流域で報告される石材とよく似ている（Anderson et al. 2004: 95; Chabot and Pelegrin 2012: 195）。またその他の石材に関してもハッセク・ホユック（Hassek Höyük）の報告書カラー図版に掲載されている石器石材と似ている（Behm-Blancke 1992: TAF. 33, 34）。

カナアン石刃の生産址は、南東アナトリアのティトリシュ・ホユック（Titriş Höyük）で唯一産業的な大量生産の工房が確認されている他は（Hartenberger et al. 2000; Hartenberger 2003）、石核や製作残滓、製品石刃のキャッシュなど、断片的な証拠が散発的に確認されるだけの場合がほとんどである。しかしむしろ、これら生産、流通に関わる多様な証拠が断片的に発見されることから、カナアン石刃は、かつて考えられていたような遠距離交易品ではなく、近距離の流通品であって、流通の仕方も多様であったと考えられるようになっている（Milevski 2013; Frahm 2014; Manclossi et al. 2016）。キュルテペ遺跡では石核などの制作の証拠は無いので、石刃が製品としてもたらされたと考えられる。そして石材の類似性から、キュルテペ遺跡のカナアン石刃は南東アナトリアで制作された可能性が高い。キュルテペ遺跡に最も近いカナアン石刃の生産関連遺跡は、現在知られている限りでは、南東アナトリアのハッセク・ホユックである（図 2: b）。ここからキュルテペ遺跡までの間に良質なフリントの産地は無いので、未知の制作遺跡が見つかる可能性は低い。となると、カナアン

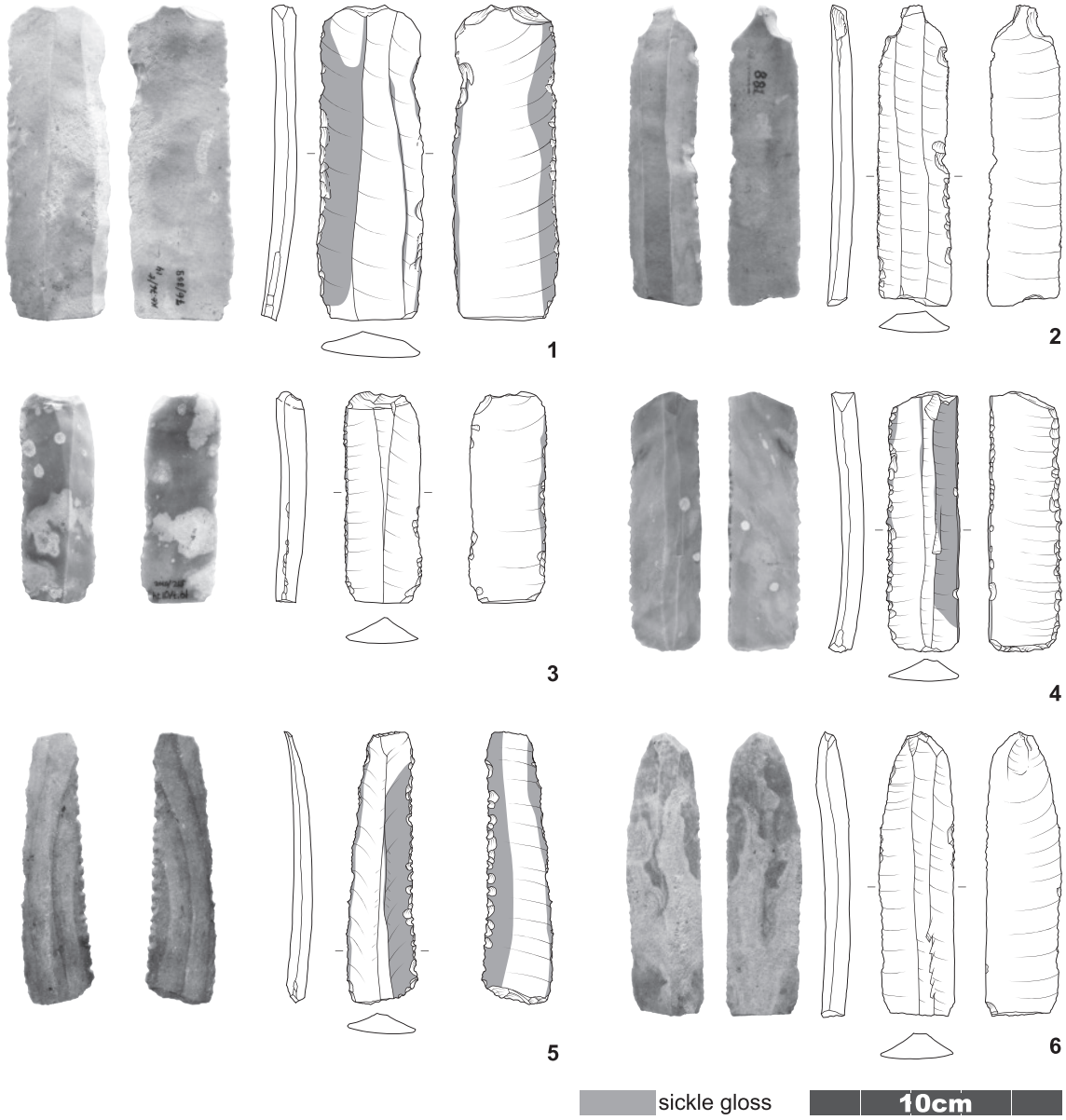


図 6　キュルテペ遺跡のカナアン石刃

石刃の長距離交易というかつての考えが再び浮上してくる（Sudo 2021）。

いずれにせよ、前期青銅器時代Ⅲ期の頃には、カナアン石刃を通じて南東アナトリアとの交流を確認することができた。カナアン石刃はほとんどの場合、截断され、鎌刃光沢が見られる。鎌や脱穀橇に装着されムギの刈り取りやワラの裁断に使われた日常的な実用品であった。カイセリ地域と南東アナトリアは、日常的に物資のやりとりがあったことを示唆する。

6. おわりに

トルコ共和国カイセリ県遺跡調査プロジェクト＝KAYAP で得られた資料からカイセリ県における銅石器時代から前期青銅器時代の考古学的所見をいくつか得ることができた。まず遺跡分布からは、アッシリア・コロニー時代を含む中期青銅器時代に遺跡数が減ることを観察した。中央アナトリアの他地域でも同様の傾向が観察されているので、中央アナトリアの広範囲における一般的な傾向としてみて良いであろう。そしてこれを、拠点集落に人口が集中する都市化の現象と見るのかどうかは、今後の検討課題である。

KAYAP によって、いくつかの種類の土器を銅石器時代に比定することができた。そして、カイセリ県で不明確であった銅石器時代遺跡の存在を明らかにした。カイセリ県で採集された赤黒土器は南東アナトリア方面と、曲線彩文土器はカイセリの北西地域との交流を窺わせるものであった。そして南東アナトリアか

らカイセリ県、およびその北西地域への方向性は、アッシリア・コロニー時代に推定されている交易ルートとも重なる。

最後にキュルテペ遺跡およびKAYAPで採集されたカナアン石刃は、前期青銅器時代における南東アナトリアとの日常的な物資流通を窺わせるものであった。

遺跡踏査による表面採集資料から得られる所見は以上のように、作業仮説的な所見にとどまる。これらの仮説が、今後キュルテペ遺跡をはじめとする遺跡の発掘調査による層位的データで検証されていくことが期待される。

謝辞

アンカラ大学のフィクリ・クラックオウル教授、ノートルダム清心女子大学の紺谷亮一教授には、カイセリ県での遺跡踏査、および資料調査について様々な便宜を図っていただいた。アナトリア考古学研究所の大村幸弘所長には研究所保管資料の調査をお認めいただいた。記して感謝申し上げます。

本稿は、山陽放送学術文化財団研究助成、三島海雲記念財団学術奨励基金、科学研究費補助金奨励研究 20H00690 の成果の一部である。

参考文献

Allcock, S. L. and N. Roberts 2014 Changes in Regional Settlement Patterns in Cappadocia (Central Turkey) since the Neolithic: A Combined Site Survey Perspective. *Anatolian Studies* 64: 33–57.

Anderson, P. C., J. Chabot and A. van Gijn 2004 The Functional Riddle of "Glossy" Canaanean Blades and the Near Eastern Threshing Sledge. *Journal of Mediterranean Archaeology* 17(1): 87–130.

Barjamovic, G. 2011 *A Historical Geography of Anatolia in the Old Assyrian Colony Period*. Copenhagen, Museum Tusculanum Press and CNI Publications.

Behm-Blancke, M. 1992 *Hassek Höyük: Naturwissenschaftliche Untersuchungen und lithische Industrie*. Tübingen, E. Wasmuth.

Chabot, J. and J. Pelegrin 2012 Two Examples of Pressure Blade Production with a Lever: Recent Research from the Southern Caucasus (Armenia) and Northern Mesopotamia (Syria, Iraq). In P. M. Desrosiers (ed.), *The Emergence of Pressure Blade Making: From Origin to Modern Experimentation*, 181–198. New York, Springer.

Frahm, E. 2014 Buying Local or Ancient Outsourcing? Locating Production of Prismatic Obsidian Blades in Bronze-Age Northern Mesopotamia. *Journal of Archaeological Science* 41: 605–621.

Frangipane, M. and G. Palumbi 2007 Red-Black Ware, Pastoralism, Trade, and Anatolian-Transcaucasian Interactions in the 4th-3rd Millennium BC. In B. Lyonnet (ed.), *Les Cultures du Caucase (VIe-IIIe millénaires avant notre ère): Leurs relations avec le Proche-Orient*, 232–255. Paris, CNRS Éditions.

Gerber, C. 2008 New Insights into the Settlement History of the Tavium Region (NW Part of the Yozgat Province). In K. Strobel (ed.), *New Perspectives on the Historical Geography and Topography of Anatolia in the II and I Millenium B.C.*, 189–234. Firenze, LoGisma editore.

Gülçur, S. 2004 Güvercinkayası. The Black/Dark Burnished Pottery: A General Overview. *TÜBA-AR: Turkish Academy of Sciences Journal of Archaeology* 7: 141–164.

Hartenberger, B. E. 2003 *A Study of Craft Specialization and the Organization of Chipped Stone Production at Early Bronze Age Titriş Höyük, Southeastern Turkey* (PhD Dissertation). Boston, Boston University.

Hartenberger, B. E., S. A. Rosen and T. Matney 2000 The Early Bronze Age Blade Workshop at Titriş Höyük: Lithic Specialization in an Urban Context. *Near Eastern Archaeology* 63(1): 51–58.

Kontani, R., H. Sudo, Y. Yamaguchi, Y. S. Hayakawa and T. Odaka 2014 An Archaeological Survey in the Vicinity of Kültepe, Kayseri Province, Turkey. In L. Atici, F. Kulakoğlu, G. Barjamovic and A. Fairbairn (eds.), *Current Research at Kültepe-Kanesh: An Interdisciplinary and Integrative Approach to Trade Networks, Internationalism, and Identity*, 95–106. Atlanta, Lockwood Press (The American Schools of Oriental Research).

Kulakoğlu, F., R. Kontani, A. Uesugi, Y. Yamaguchi, K. Shimogama and M. Semmoto 2020 Preliminary Report of Excavations in the Northern Sector of Kültepe 2015–2017. In F. Kulakoğlu and C. Michel (eds.), *Integrative Approaches to the Archaeology and History of Kültepe-Kaneš*, 9–88. Turnhout, Brepols.

Manclossi, F., S. Rosen and P. de Miroschedji 2016 The Canaanean Blades from Tel Yarmuth, Israel: A Technological Analysis. *Paléorient* 42(1): 49–74.

McMahon, A. 2019 Early Urbanism in Northern Mesopotamia. *Journal of Archaeological Research* 28: 289–337.

Milevski, I. 2013 The Exchange of Flint Tools in the Southern Levant during the Early Bronze Age. *Lithic Technology* 38(3): 202–219.

Mori, M. and S. Omura 1990 1988 Kırşehir, Yozgat ve Nevşehir illeri Yüzey Araştırmaları. In *7. Araştırıma Sonuçları Toplantısı*, 295–310. Ankara, Ankara Üniversitesi Basımevi.

von der Osten, H. H. 1937 *The Alişar Hüyük Seasons of 1930-1932, Part 1(Researchs in Anatolia 2)*. Oriental Institute Publications 28. Chicago, The University of Chicago Press.

Palumbi, G. 2008a Mid-Fourth Millennium Red-Black Burnished Wares from Anatolia: A Cross-Comparison. In K. S. Rubinson and A. Sagona (eds.), *Ceramics in Transitions: Chalcolithic through Iron Age in the Highlands of the Southern Caucasus and Anatolia*, pp. 39–58. Ancient Near Eastern Studies Supplement Series 27. Leuven/Paris/ Dudley, Peeters Publishers.

Palumbi, G. 2008b *The Red and Black: Social and Cultural Interaction between the Upper Euphrates and the Southern Caucasus Communities in the Fourth and Third Millennium BC*. Roma, Dipartimento di Scienze Storiche Archeologiche e Antropologiche dell'Antichità, Sapienza Università di Roma.

Schoop, U.-D. 2005 *Das anatolische Chalkolithikum: Eine chronologische Untersuchung zur vorbronzezeitlichen Kultursequenz im nördlichen Zentralanatolien und den angrenzenden Gebieten*. Urgeschichtliche Studien 1. Remshalden, Verlag Bernhard Albert Greiner.

Schoop, U.-D. 2008 Ausgrabungen in Çamlıbel Tarlası 2007. *Archäologischer Anzeiger* 2008(1): 148–157.

Sudo, H. 2021 Canaanean Blades from Kültepe, Central Anatolia. In F. Kulakoğlu, G. Kryszat and C. Michel (eds.), *Cultural Exchanges and Current Researches at Kültepe and Surroundings, Kültepe, August 1-4, 2019, Kültepe International Meetings 4*, Subartu 46. 51–63. Turnhout, Brepols.

Sudo, H. (in press) Examination of the Painted Ware of Early Phases of Early Bronze Age in Central Anatolia, Collected by the *Kayseri Arkeolojik Yüzey Araştırması Projesi*. In Ç. Maner, M. Weeden, M. Omura and K. Matsumura (eds.), *It All Began with Stratigraphy and Chronology: Archaeology in Central Anatolia (Festschrift Dedicated to Sachihiro Omura on his 75th Birthday)*. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.

Sudo, H., Y. Yamaguchi and R. Kontani 2017 An Archaeological Assessment of the Kayseri Province during the Chalcolithic Period: New Evidence from the Archaeological Survey Project in Kayseri, Turkey (KAYAP). In F. Kulakoğlu and G. Barjamovic (eds.), *Movement, Resources, Interaction: Proceedings of the 2nd Kültepe International Meeting, Kültepe, 26-30 July 2015*, Subartu 39. 227–242. Turnhout, Brepols.

紺谷亮一・小髙敬寛・須藤寛史・早川裕弌・山口雄治・F. クラックオウル・K. エムレ・S. エゼル・G. オズトゥルク 2013「トルコ共和国カイセリ県遺跡調査プロジェクト（KAYAP）第 5 次調査（2012 年）概報」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』27 巻　15–42 頁。

須藤寛史　2015「トルコ共和国カイセリ県の赤黒土器―紀元前 4–3 千年紀におけるカイセリ県の考古学的位置付け―」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』29 巻　14–29 頁。

須藤寛史　2018「中央アナトリア、キュルテペ遺跡のカナアン石刃」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』31 巻　33–44 頁。

三宅　裕　1992「中央アナトリアにおける銅石器時代―一般調査を通してみた編年上の諸問題―」『アナトリア考古学研究』Vol. I　196–223 頁。